

篠山城(殿藪)(市指定史跡)(甲賀市甲賀町鳥居野)

篠山城は、甲賀町鳥居野のうち、東出集落の北端で、大橋川南河岸の台地上に築かれている。市指定史跡になっていて、東辺土塁の開口部に案内板が建っているが、まるで整備されておらず、城内北半分は高いブッシュに覆われている。

縄張は、東西約 50m×南北約 60m の主郭 I と腰曲輪状の II からなる。基本的には四方を土塁と、北側自然崖以外の三方を堀で囲む一般的なプランである。土塁は削り残しではなく、平城ならではの、盛土だと判る綺麗な断面台形で、よじ登ることが困難な急斜面になっている。

東辺と西辺の開口部は切り通し状で後世の破壊に見える。南辺は土塁が破壊され、あまりに開口が広いが、本来の虎口はここにあったと考えられる。

西辺土塁の外側には水濠が残り、近年までは南辺にも濠が残っていたが埋め立てられた。東辺の道路も本来は堀であったのではないかと指摘されている。西辺開口部に架かる土橋は後世のものかも知れない。

a と b には浅い空堀が確認できる。I の北辺は庭園跡だと指摘されているが、ブッシュがひどく確認できなかった。

土塁の形状、水濠、庭園など、近世に築かれた城らしい遺構だな、と感じた。

城主篠山氏は、甲賀五十三家に数えられた大原氏の庶流で、戦国末期の蔵人頭景元(景助)の時に笹山姓に改姓し、その子景春(資家)はさらに篠山姓に改姓した。

豊臣政権化での甲賀武士はことごとく所領を失い、多くが流浪を余儀なくされていた。やがて秀吉が没すると、元々徳川家康との関係を築いていた景春は、近隣十郷の代官に取り立てられた。この時期に豊臣勢力に備えて篠山城の築城を開始したと考えられる。

慶長6年(1600)6月、上杉景勝を討つため途中近江国石部に宿をとった徳川軍に、水口城主で五奉行の一人長束正家が、家康の謀殺を企てていたことを察知した篠山景春が通報した。

同年7月、石田三成が家康打倒の兵を挙げ、家康の老臣鳥居元忠が守る伏見城を攻撃した。この伏見城の戦いに、篠山景春・景尚父子をはじめ多くの甲賀武士が籠城、激戦のすえにことごとく戦死した。

これにより、築城中であった当城は完成を見ないまま廃城になったと思われる。

関ヶ原に勝利し、江戸幕府を開いた徳川家康は、伏見城で戦死した景春と嫡男景尚の論功として、篠山家の存続を許し、二男資盛に旗本として鳥居野を安堵した。資盛は当城近くに新たに笹山陣屋を築いた。篠山氏は、その後江戸時代を通して旗本の地位を守りぬいた。

「お城のとびら」による

『日本城郭大系 11』によりますと、所在地は「甲賀郡甲賀町鳥居野字八幡山」、創築年代は「慶長年間(一五九六一一六一五)」、創建者は「大原篠山理兵衛景春」、型式は「平城」です。城の歴史は「(前略)長方形の郭をもち、土塁の高さは、東西南面約3m、北面約6m、堀は西面堀は完存しており、さらに平坦地を経て、二重の堀が残っている。北面は築上土塁と、地山整形土塁のすそに二つに別れた堀がある。南正面堀については、現在埋まっている。また東面堀については、道路となっているが、堀が存在していたと考えるのが一般的である。郭への入口は南側であるが、土塁が一部崩壊しているため、城門の様子は不明である。北面土塁は、郭内に二重土塁があり、内側は、低い土塁である。この二重土塁の間は凸凹のはげしい遺構であるため庭園ではないかと思われる。郭から西側に平地があり、一部に堀が認められる。さらに、城の周辺には、方形プランの小道があり、これらには、篠山氏の家臣の家や、城郭の一部施設があったようである。城主である篠山氏は大原氏の一族で、正式には大原篠山氏で、当時の甲賀地方は、同名中(一族名)と個人の複数の姓をもっている。したがって、対外資料には大原氏の名で、地方資料には篠山氏として現われる。『改正三河後風土記』によれば、慶長五年六月、徳川家康は会津の上杉景勝を討つため伏見より東下して、石部で宿泊をしていた。水口岡山城主長束正家がそこへ参上して、岡山城への招

待を申し出たが、篠山城主篠山備中守理兵衛景春は、その招待が豊臣方の策謀であると家康に告げ、夜中に家康を鈴鹿峠まで送った。家康と大原氏の関係は、大原氏は旧姓富永・設楽氏で、三河武士であることと、永禄三年（一五六〇）の桶狭間合戦での家康の陣であった大樹寺（岡崎市）の登誉上人の弟子に大原景頭の弟祖道がいたため、甲賀の大原一族も参軍したのである。（中略）また、慶長五年八月一日、鳥居元忠の麾下に属して伏見城を守る。（中略）伏見籠城の篠山氏戦死者は、篠山理兵衛景春・彦十郎景尚従臣十人。（中略）篠山城は、理兵衛の戦死で廃城となるが、徳川幕政下では再び篠山氏は同地で陣屋を構え代官となる」とあります。なお、甲賀郡甲賀町鳥居野字八幡山は現在甲賀市甲賀町鳥居野になっています。

